

高等教育研究センター

かわらばん

秋号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニュースレター第40号

研究大学における

カリキュラムを考える一つの枠組み

学士課程の学生にとって研究

であろう。

とはいかなるものなのか。大学には教育と研究という2つの大きな使命がある。研究は教員や一部の大学院生のみが目指すべき目的なのであるか。それとも学士課程の学生も共有すべき目的なのだろうか。学士課程の学生も共有すべき目的であるならば、いかにして大学の研究活動を学士課程教育に反映させることができるのであろうか。

近年、欧米の大学では学士課程教育における学生の研究体験(Undergraduate Research)を促進する方策がとられている。左上の図は、学生の研究体験の多様な形態を2つの軸で整理した枠組みである。左右の軸は、研究内容を重視するか、それとも研究の過程や課題を重視するかである。上下の軸は、学生にとって能動的な活動なのか、それとも受動的な活動なのかである。学生主導と教員主導と

II型は、研究の過程や課題を重視し、教員主導で行われる形態である。この形態では、専門分野で知識がどのように創造されるのかという過程や研究上の課題を理解することが重視される。研究方法や技術、さらには研究への姿勢の習得を目指した授業がこの形態にあてはまる。

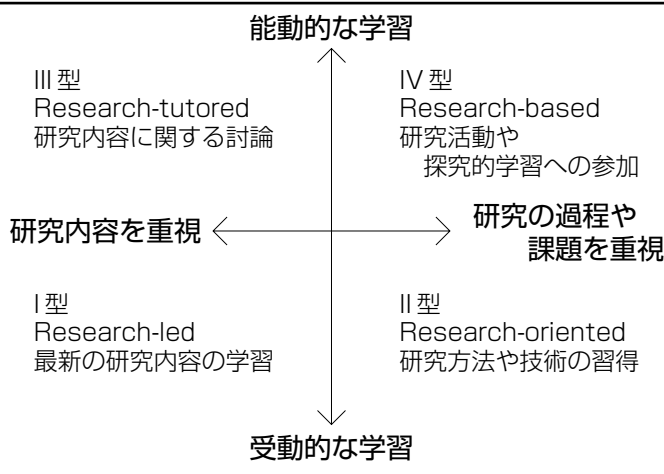
この学生の研究体験の枠組みは、学生に研究を体験させるには多様な方法があることを示すのみでなく、カリキュラムや授業について議論する際の枠組みとして活用することができるであろう。所属部局の教育の現状を分析する際にどの形態の研究体験が不足しているのかを総合的に考えるきっかけになるだろう。

これらは、研究大学を標榜する名古屋大学にとって重要な問い

この2つの軸によって4つの象限ができ、それぞれI型、II型、III型、IV型の形態に分類される。I型は、研究内容を重視し、教員主導で行われる形態である。専門分野における最新の研究内容を扱った授業がこの形態にあてはまる。このような授業では、教員によって学習内容が選定され、伝統的な知識伝達モデルによる教育が行われることが多い。

III型は、研究内容を重視し、学生の参加度が高い形態である。イギリスの伝統的な大学のチュートリアルが念頭に置かれており、研究内容に関する討論を通じて学習が促される。

近年、アクティブラーニングの重要性が叫ばれているが、これを単に教授法のテクニックの問題として捉えるべきではない。最もアクティブな学びといえる研究という観点から、名古屋大学のカリキュラムや授業を捉え直す契機にしてみてもどうか。



この4つの分類は、概念上の

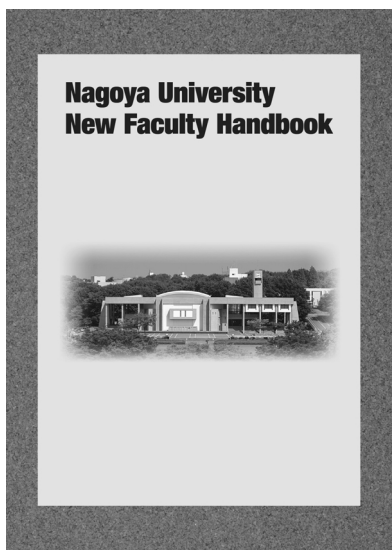
この4つの分類は、概念上の

名大新任教員ハンドブック英語版を制作

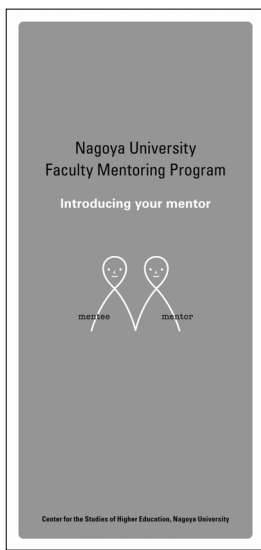
このたび高等教育研究センターでは、新任教員ハンドブックの英語版『Nagoya University New Faculty Handbook』を制作し、学内の外国人教員全員に配布しました。本ハンドブックでは名古屋大学で教鞭をとる上で必要な各種の服務規程、教務上の

ルール、災害時の対応方法、各種手続きや相談窓口などについてまとめました。また、経験のある教員が新任教員と交流し、相談にのる仕組み「名古屋大学教員メンタープログラム」を外国人教員向けにも始めました。パンフレットの英語版も作成しました。

9月11日にはグローバル30プログラムで新規採用された外国人教員向けオリエンテーションを実施し、同プログラム学生の入学・学修状況の報告や先輩教員からのアドバイスを行いました。高等教育研究センターでは、今後も外国人教員に対する支援を充実させていく予定です。(近田政博)



Nagoya University New Faculty Handbook



名古屋大学教員メンタープログラム 英文パンフレット

※ウェブサイト (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp>) よりPDFデータをダウンロードできます。



G30 新任教員オリエンテーションの様子

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

経験学習論

Theory of Experimental Learning

学習スタイルに関する理論の一つで、コルブ (D. Kolb) により提唱された理論が有名である。彼は学習を以下のように定義している。「学習とは経験の変換によって知識が形成される過程である」。個人の得た経験の中から学習の要素をとりだし、それをなんらかの知識へと展開することといえよう。

コルブによれば、経験学習には、主に以下のような特徴が含まれる。①学習は過程であり結果ではない、②学習は経験に基づき中断なく行われる過程である、③学習は社会に適應する過程で、相反するモードを融合することにより行われる。

社会人が獲得する知識の約7割は経験に基づく、としばしば指摘される。その背景には、社会人固有の事情がある。彼らは、職場や家庭でまとまった教育を受けることは時間的・経済的に難しい。一時的に職場を離れて行う研修である Off-JT は多くの企業で行われているが、実際にそれを受講できる人は限られている。その機会の得られない人は、自己啓発による学習か、諸教育機関の提供する学習を自費で利用することになる。それが難しい場合には、身近な資源を用いた学習スタイルを追求せざるを得ない。一方、社会人は職務遂行の過程で、日々多様な経験をしており、職務外では得にくい経験や事前に想定できない経験も多い。そのような場合でも、対応策を考え状況を打開することが求められる。しかも限られた時間内で、という条件付きである。

そのような経験の中から学ぶことは少なくない。むしろ、Off-JT で学ぶこと以上に多くの学習要素が含まれることもしばしばである。現実の対応を求められる分、そこでの学習には、真剣さと切実さが要求されるからである。

ただし、経験に内包される学習要素を知識として創造するためには、その要素を純化・高度化させることが必要である。そのためには、それなりの努力とステップが不可避である。その一つは省察 (Reflective Observation) であり、自分が行った経験を多様な観点から批判的に考察することである。次に「概念化 (Abstract Conceptualization)」であり、考察から得られた素朴な知見を、多くの場面でも活用できるようにより普遍的な内容に高めることである。さらに「試行 (Active Experimentation)」であり、得た知識を新たに発生する状況の中で多様な角度から試してみることである。この試行を繰り返しつつ、内容を吟味し深化させることが、より普遍的で高度な内容の知識を生み出すことにつながる。

経験学習論は成人の学習スタイルとして論じられることが多いが、一般学生の学習にも当てはまる部分は少なくないと考えられる。(夏目達也)

中国の大学における教育の質保証

客員教授 / 南京師範大学 胡建華

昨今の中国の高等教育の主な特徴として量的成長が挙げられます。2010年、中国には2358校の高等教育機関があり、大学新入生数は662万人で、大学生数が世界最大となっています。この20年ほどの間に学生数が5倍以上も拡大するという急激な変化のため、教育の質の低下が懸念されています。

中国の大学と各大学にとって、高等教育の質の保証と向上は喫緊の課題です。政府はまず学士課程教育の質保証に力を入れ始めました。学士課程教育は大学の基礎であり、大学のレベルアップには学士課程教育を強化しなければなりません。その強化のためには、個々の教員が学士課程教育に尽力することが必要と考えられます。しかし、中国の大学教員は他国の大学教員と同じく研究にも力を入れており、教育より研究を重視する傾向もあります。

このような状況のなかで、政府や大学は次のような措置をとっています。

第一は、学士課程教育の評価を強化したことです。2003年からの4年間にわたり、国务院教育部はすべての大学に対して学士課程教育の評価を実施し、優秀、良好、合格、不合格の4区分で評価を行いました。大多数の大学は合格以上の評価となりましたが、同時に多くの問題も指摘されました。

第二は、教員個人の評価システムに学士課程教育についての項目を入れたことです。例えば、学生による授業評価結果や学士課程教育についての論文業績が教員の昇進を左右するようになりました。

第三は、政府が学士課程教育の質保証に多くの経費を投入したことです。2007年に教育部は「学士課程教育の質保証と教学改革プロジェクト」をスタートさせました。さらに2012年初め、教育部は「高等教育の全面的な質向上に関する意見」を発表し、学士課程教育の質保証のために年間8億元 (日本円で約100億) のプロジェクト経費を投入しました。

現在、教育の質保証は中国の高等教育改革において中核に位置づけられ、大学の外部からの評価と内部の管理を組み合わせた高等教育の質保証システムが成立しつつあります。

読んでおきたい

この1冊

Great Books on University

『偶然の科学』

ダンカン・ワッツ (Duncan J. Watts) 著 青木創=訳
(英文タイトル: Everything is Obvious - Once You Know the Answer -)
2,200円 早川書房 2012年1月

著者はコーネル大学で物理学博士号を取得した後、スモールワールド現象 (わずか6, 7人の知人を介すれば、世界中の人間が繋がるとい説) をネットワーク理論の見地から解明した論文 (1998年、ネイチャー誌で発表) の著者の一人として一躍有名になった人物である。現在はコロンビア大学社会学部に所属し、ネットワーク科学、特に、社会的ネットワークの構造や集団形成のダイナミクスの分野で活躍中である。

本書は、最初に、我々がいろいろな事柄を理解、判断、決定する際に用いる「常識」が如何に信憑性の薄いものであるか、理にかなっていないかを、興味深い実例 (臓器提供、モノリザの絵など) を用いて論証する。さらに、個人のミクロな選択から実社会のマクロな現象がどのように形成されるかを、ダイナミクスや確率の枠組みを取り入れながら論じている点は、理工学を専門にする方々にも興味深いのではないだろうか。

社会科学の実験観測で、膨大なデータを収集し処理するのに、メールやフェイスブックなどのインターネット技術が有効であることに驚きを感じたが、デジタルデバイドのこちら側にいる者としては「Et tu, Brute?」の感である。

物理学の研究は一般性に富む少数の法則を明らかにしてきた。社会学の研究にそのようなことを望むことは無理難題。そう考えながらも著者は「中範囲」にでも適用できる理論構築を願っている。「社会科学は未だに自分たちのケブラーを見いだしていないが、インターネットという自分たちの望遠鏡を手に入れた」という著者の言葉から、社会科学における新しい展開への期待が膨らんだ。社会科学を専門とする方のみならず、人間の集団形成や集団行動に興味のある方にも気楽に読める一冊である。(早川義一)

高等教育研究センタースタッフ (2012年10月現在)

センター長	早川 義一	専門領域: 制御工学	国内客員	松塚 ゆかり	(一橋大学大学教育研究開発センター)	名古屋大学高等教育研究センター
教授	夏目 達也	専門領域: 高等教育学、技術・職業教育論		淵上 克義	(岡山大学大学院教育学研究科)	〒464-8601 名古屋市千種区不老町
准教授	近田 政博	専門領域: 比較高等教育学、学習支援		橋本 鈺市	(東京大学大学院教育学研究科)	Tel 052-789-5696
准教授	中井 俊樹	専門領域: 大学教育論、高等教育マネジメント	外国人研究員	胡 建華	(中国・南京師範大学)	Fax 052-789-5695
助教	齋藤 芳子	専門領域: 科学技術社会論		柳 志憲	(韓国・全南大学)	E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
						URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/